

2022年8月21日 聖霊降臨節第12主日礼拝

メッセージ「あなたが触れてくれたから」

岡嶋千宙伝道師

聖書 エレミヤ書 1章4-10節

8月も下旬に入ったのに、暑さの退く気配はなく、夜も気温が下がらない熱帯夜が続いています。今年は、雨の影響で湿気も加わり、ますます寝苦しい夜。寝不足解消と熱中症予防のために、クーラーをつけたり、扇風機を回したり、あるいは寝具を変えたり、という方も多いと思います。わたしは、というと、クーラーや扇風機は必要に応じて使っているのですが、寝具に関しては、いまだ毛布です。しかも冬物の厚手のもの。どんなに暑くても毛布にくるまって寝ています。さすがに、暑すぎて、途中で無意識にガバッと毛布を横に追いやることもありますが、寝入るときには毛布がないとダメ。しばらくたって、毛布を着ていないことに気づいたときは、不安になって、そこら中を探して毛布を手繰り寄せ、もう一回くるまるという感じ。他の人からすれば、おかしい光景だと思います。それほどこだわりが強い方ではないのですが、小さい頃から、肌の感覚は敏感でした。毛布の他にも、服やタオルの生地など。ダメな素材は絶対にダメ。大人になってからは割とましになったのですが、最近では少し前に流行ったツルツとした感じの生地。ユニクロなどで、トレーナーとかパーカーとかに使われていたもので、触った瞬間に虫酸が走るというか。鳥肌が立って一瞬で全身の力が抜けていくのです。

もう一つ、「触る」ということのエピソード。わたしの所属している向島伝道所には、わたしの他にも牧師がいます。黒多さんという全盲の方で、視覚情報に頼ることができないので、自分の手を伸ばして、そこにあるものに触れて、触れたものの感触で、自分がいる状況を把握しています。また、外出するとき、わたしが手引きとなることがあるのですが、その時、黒多さんはわたしの右腕、肘の上くらいを持ちます。黒多さんが左の手でわたしの肘上をつかんで、わたしが先導して歩く。黒多さんの手がわたしの腕に触れた状態で、共に歩みを進めるのです。「触れる」「触れられる」。人が生きる上で、大切な役割を果たす行為です。生きるということは、当然に身体を伴うものなのですが、改めて、その身体を通じて得る感覚って大事なんだなあと思わされます。そういえば、誰かに恋心を抱くとき、その人に触れる、または触れられるというだけで、天にも上るような喜びを覚えることもあります。

本日の御言葉。与えられた箇所少し前に、場面設定が記されています。登場するのはエレミヤという人物。南王国ユダの首都、エルサレムの北部に位置するアナトトという町に住んでいた祭司家系の人です。「ヨシヤ・ヨヤキム・ゼデキヤ」というユダ王国の3名の王様の名前が記されていて、年代は紀元前620-580年くらい。ユダ王国の末期、最後の40年間で、宗教、政治、経済、文化、外交のあら

ゆる面で、国中が混乱していた時でした。そんな大変な時期に、エレミヤが預言者として立てられようとしている、というお話です。「預言者」ですから、神の言葉を語る人物です。では、この場面で、神がエレミヤに何を語るように命じたかという、「裁き」です。ユダ王国の人々を含めて、イスラエルの人たちは皆、罪を犯した。民族の歴史を通して救いを与え続けた神を忘れて、悪を行い、私腹を肥やし、国を滅ぼそうとしている。その報いがイスラエルの人々に降りかかる、と。10 節「(人々・国々は)引き抜かれ、壊され、滅ぼされ、破壊され」、そして新たに「植えられ、建て直される」。神の召しを受けたエレミヤは、素直に「うん」と言ったわけではありません。6 節「わたしは、まだ若くて、何を語ればいいのか分かりません。」できることなら断りたい。神の求めを受け入れたくない。当然です。自分で「若い」と言っているように、具体的な年齢は定かではないのですが、恐らく14~16歳。当時は成人とされる時期が早かったとはいえ、それでも人生経験は多くはないはずです。また、エレミヤはもともと祭司の家の人物です。祭司は、宗教上の祭儀をとりなす人であって、神の言葉を語る預言者ではありません。エレミヤ自身、祭司となる覚悟はあったのですが、預言者なんて、寝耳に水。全くもっての想定外。6 節の言葉は、ためらいというより、断固拒否、抵抗の言葉だったのでしょうか。それなのに、その言葉を聞いたのに、しつこく、粘っこく、いやらしく、説得し続ける神。4 節から 8 節で矢継ぎ早に重ねられる神の語り。それでも抵抗の姿勢を崩さないエレミヤに、神は最終攻勢を仕掛けます。それまでは「言葉」を通してしかエレミヤに近づかなかった神が、今度は、身体を用いて接するのです。「主は御手を伸ばし、エレミヤの口に触れた」。これを境に、エレミヤは抵抗の言葉を引っ込めました。決定打。クリティカルヒット。神の手がエレミヤの口に触れたことで、エレミヤは預言者となる決意をしたのです。いや、あるいは、諦めたのかもしれませんが。

預言者が神の召しを受けるという記事は、エレミヤ書の他に、イザヤ書、エゼキエル書にも記されています。エレミヤを含めて3人の召命場面を比較すると、一つの共通点に気づかされます。エレミヤ、イザヤ、エゼキエルの3名はそれぞれに、神、又は、神によって遣わされた存在、あるいは神の存在を示すものによって、口に触れられ、それを契機にして、預言の言葉が備えられ、預言者としての歩みをするようになっていくのです。3つの預言書に共通しているということから、神が「触れる」ということは、預言者に神の言葉が備えられる、ということの象徴的表現だと説明する注解書もあります。つまり、神が触れるというのは実際の行為ではなくて、表現上の技法なのだと。確かに、共通点ということだけからすれば、そうと結論付けられなくもないのですが、異なる部分もあります。神と、エレミヤ、イザヤ、エゼキエルとが触れ合うその仕方。イザヤに触れたのは、炭火です。神によって遣わされたセラフィムという天使のような存在が、神の祭壇にあった炭火を持ってきて、それをイザヤの口に触れさせた(イザ 6:6-7)。エゼキエルに触れたのは巻物でし

た。神が「哀歌と呻きと嘆きの言葉」(エゼ 2:10)に満ちた巻物を手にとって、それをエゼキエルに食べさせた(エゼ 3:1-3)。他方のエレミヤ。神は自分の手を伸ばし、その手でエレミヤの口に触れた。神が、直接に自分で触れたのは、唯一エレミヤだけ。この違い、何を示しているのでしょうか。わたしが見た限りでは、この違いに着目している注解書はありませんでしたが、ここには、見逃すことのできない大切なメッセージが込められているように思えます。聖書の神を語る上で、決して無視することのできないメッセージ。

エレミヤ書の冒頭、1章には、「主の言葉」という表現が頻繁に出てきます。ここで「言葉」と訳されている単語。もとのヘブライ語を辿ると、「言葉」だけではなく、その言葉を用いる人の全人格、あるいはその人そのものという意味を持っています。特に、神と結び付く場合、神その方、神の全存在を表すものとして使われます。この意味からすると、神の言葉が臨むというのは、神の言葉の臨んでいる対象、この場面では預言者として召されているエレミヤに、神その方が迫ってくるということになります。神が、その全存在をもって向かってくるのです。

そして「触れる」。こちらもヘブライ語をたどると、「触れる」という意味だけではありません。聖書の他の箇所では、「打つ」あるいは「倒す」という意味でも用いられています(e.g. ヨシュ 8:15、詩編 73:14)。神に「触れられ」たエレミヤは、圧倒され、打ち倒されたのです。まだ若く人生経験もない青年。しかも、家業である祭司とは別の職業に就かされようとしている。神の全存在に向かってこられて、神に触れられて、圧倒されないわけがありません。打ちのめされて、動けない。全身の力が一瞬で退いていく。けれども、「触れる」という言葉には、もう一つの側面があります。わたしたちが旧約と呼ぶヘブライ語聖書が、初めてギリシア語に訳されたとき、西暦3世紀ごろのことです。この「触れる」という言葉には、「haptomai ハプトマイ」という単語が訳語として充てられました。これは、新約聖書において、福音書を中心に用いられている言葉です。その用法を見てみると、多くが、「癒し」もしくは「祝福」がもたらされる場面で使われています。イエスが病を患う人に「触れ」たり(マコ 1:41、7:33)、逆に、病を患う人がイエスに「触れる」(マコ 5:27-31)ことで、病が癒される。あるいは、イエスが子どもたちに「触れる」ことで祝福がもたらされる(ルカ 18:15)。

イエスに触れた／触れられた人たちは、変えられています。それまでとは異なる別の人生の道を歩むことになるのです。孤独が繋がりに。絶望が希望に。死が命に。変わっていく。でも、「神に愛される子」「神の子」であるなら、イエスは触れることなく、ただ、言葉を発することで、癒しや祝福を与えることができたはず。実際、イエス自身、信仰を持つ者が「動け」と言うのならそれだけで山をも動かすことができる、と言っています(マコ 11:23)。なのにイエスは、触れているのです。言葉だけではなく、自分の身体を動かして、他者の身体に触れ、他者との間に肉体的な接点を造り出しているのです。「主は御手を伸ばしてエレミヤの口に触れ、

言われた。『私はあなたの口に私の言葉を授けた。』このとき、エレミヤに備えられたのは、単純な言葉だけではなかったのでしょうか。エレミヤは、神の言葉だけではなく、神の存在を、自分の身体を通して、身体感覚を伴って、感じたのです。自分と同じ肉体をもった存在として、確かに神を感じたのです。神の手が触れた感覚。自分の口が触れられた感覚。その感覚をしっかりと得た。実感として否定できない皮膚感。幼い子どもが、親の腕に抱かれているときのような。恋心を寄せるあの人に触れた／触れられたときのような。神の言葉に、神の存在に、圧倒され、打ちのめされそうになったけれども、そこには、神が触れたという確かな感覚があった。自分の皮膚を通して柔らかく暖かく染み渡る感覚があった。神に触れられたエレミヤは、その後、預言者として歩みはじめます。その歩みは決して平坦で、容易なものではありませんでした。異なる世界観・宗教感を有する者たちからの攻撃を受け、同郷の人たちからも見放され、時に命を狙われることもありました。その度に、エレミヤは嘆きと後悔の言葉を発しています。ですが、それでも、最後まで預言者としての歩みを続けたのでした。そして今、わたしたちの手元に、彼の足跡が聖書の言葉として残されています。エレミヤが、確かに、自分の身体を通して、神との身体的な触れ合いの感覚を有していたからこそ遺せた信仰の軌跡。

神に出会い、神に触れられる。もちろん、神に実体はありません。ひょっとしたら、あるのかもしれないけれども、この時点で、人間が分かるような形で、具体的・物質的に、自分の手で触れて、自分の身体感覚で感じられるようなものではありません。そして、追い討ちをかけるように、新型コロナウイルスの感染拡大によって、人と人との間の接触も避けられています。触れることが死に結び付くことだってありえる現代の世の中。触れる・触れられるという感覚、身体・肉体の持つ感覚が、人々の日常から遠ざけられています。その反動で、触れない形で、人との繋がりが新しく作り出されているという喜ばしい側面もあるのですが、でも、だけど。人と人との身体的なつながりが希薄になるにつれて、人と神との繋がりもまた、ますます薄まっていっているのではないのでしょうか。神と人が身体的に、肉体的に触れあう、という感覚が忘れられてしまうとき、肉となった言であるイエスの存在自体がないがしろにされることになるでしょう。イエスに繋がり続けるために。神の愛のうちに生き続けるために。だから、教会において、社会において、地域において。それぞれの交わりの中で、今一度、触れあうということを忘れないようにしたいのです。お互いの身体を向き合わせることを大切にしていきたい。目の前にいるあの人の息を感じ、声を聞いて、命の温度を互いに感じあっていきたい。信仰は、単なる言葉ではなくて、また、思想や学問の場で養われるものでは決してないのだから。イエスを、神を信じるということ。それは、わたしたちの日常の|コマ|コマで、わたしたち自身の身体を、肉体を通して培われる生き様の上からこそ、成り立つものなのですから。